

西條隆雄・植木研介・原英一・佐々木徹・松岡光治編著

『ディケンズ鑑賞大事典』

一人の作家を取り上げて大冊の事典が編纂されるということは、そのこと自体、その作家についての情報を求める読者の層が限りなく厚いということを意味する。またそれがその作家の存在感の大きさ、偉大性を示す指針となるものでもある。

このたび出版された『ディケンズ鑑賞大事典』は、主筆編集者西條隆雄氏の「ディケンズ・フェロウシップ日本支部が総力を挙げて世に送るもの」(「はしがき」)という気概のほどからも窺えるように、日本においてディケンズがシェイクスピアに比肩しうるような存在感を持った作家として認知されることを熱望する、編集者ならびにフェロウシップ会員たちの熱い思いのまさに結実と言ってよいものだろう。事実、本事典は5名の編集者と34名の執筆者(うち外国人2名とその翻訳者を含む)による本文748頁、それに書誌、索引等を合わせて836頁の函入りの大冊豪華本と、加えて、付録として添付されているCDに内蔵された日本人によるディケンズ研究の文献目録、作品梗概、その他作家・作品に関連する地名・地図など、100MBに余る龐大な記録・資料を含めると、その情報量の豊かさという点で、特定の作家を扱った事典としては、『研究社シェイクスピア辞典』(2000年)に優るとも劣るところのない壮大な規模の画期的な仕事となった。まずは多年にわたってこの企画の完成に尽力された関係者一同の努力と情熱に深甚の敬意を表したい。

本書の構成は、巻頭に小池滋氏のディケンズの生涯全体を俯瞰する論文をおき、以後フェロウシップ会員の手になる論文集がテーマごとに配列されている。第1部「作品」の項目に『ボズのスケッチ集』以降のディケンズのほぼ全作品の紹介、第2部「想像力の源泉」では作家の生まれ育った環境や時代背景について、第3部はディケンズの文学以外のジャーナリストとして、また演劇や公開朗読会など「多岐にわたる活動」の紹介に費やし、第4部は挿絵や映画、またシェイクスピア、ドストエフスキー、日本の作家たちとの関連など「ディケンズ文学の広がり」に、本論部分の最後第5部に、1870年代から現代に至る批評の変遷を時代ごと分割・検証する作業「批評の歴史」と続き、そして最後の第6部はテキスト類、伝記、事典、その他総合的なディケンズ研究の文献目録となっている。

この事典の類書としては、*Oxford Reader's Companion to Dickens* (1999) と *Cambridge Companion to Charles Dickens* (2001) があるが、前書が項目配列型の辞典形式であるのに対し、後書は作品や時代背景をテーマごとに論ずる評論集的色彩が強いものである。本書は『鑑賞事典』と銘打っているように、独立した論文が主体となって構成されている点、どちらかといえば後者に近い編集方式のものだが、個々の作品論に限って言えば、出版形態、テキスト、時代背景、作品の批評史、問題点など、その順列法はオックスフォード版ディケンズ辞典の方式を踏襲している。両書のそれぞれの長所を取り入れ、それを編集に際して生かそうとしたのであろう。ただ、「鑑賞」に主眼を置いた編集者たちの意図を反映し

てのことが、極端に専門化することは避け、英文学関連の学生や愛好家レベルの読者を対象とした啓蒙的な内容の論文が多く、その点、ディケンズ専門家から見れば、多少もの足りなさが残る部分があるかもしれない。それと、(贅沢を言いたしたらきりがないが)、あえて注文をつけるとすれば、彼の語法と文体について、またホーソンやメルヴィルなどアメリカ文学への影響について、できることならそれぞれ一項目を設けてほしかった。

最後に余計かもしれないが、個人的なくり言をひとつ。論者は別に国粹主義にも純血主義にも加担するわけではないし、本書の企画・編集のあり方に異議を唱える気は毛頭ない。しかし、ポール・シュリッケの「ディケンズとシェイクスピア」は特別起稿ということで論外に置くとして、最新情報の伝達という事典本来の目的に鑑みて、いかにドストエフスキーがディケンズと深いかわりがあるとはいえ、アンガス・ウィルソンの1970年に書かれた論文に頼らざるをえなかったことが、正直たまらなく寂しく思えたのである。これはなにもディケンズ研究に限った問題ではなく、ここで問われているのは英文学研究全体の裾野の狭さである。日本の英文学界に現在こうした広汎な領域を自由・闊達に動き回れるような広角な視野と知識を備えた人材を見つけるのは、容易ではないという厳しい現実がある。今回の『大事典』出版は、それ自体赫々たる成果として賛辞を送るにやぶさかではないが、同時に英文学界のかかえているこうした深刻な状況をはしなくも露呈するものでもあった。(南雲堂, 2007年5月、A5版836頁 + CD、20,000円) 荻野昌利

出典『英語青年』2008年1月号